

清水昶



ガリバーの
質問

清水昶

ガリバーの 質問



五柳叢書



五柳書院

清水昶〔しみず・あきら〕

詩人。1940年東京生まれ。同志社大学法学部政治学科卒業。『現代詩文庫清水昶詩集』『太宰治論』詩集『さ迷える日本人』（共に思潮社）『三島由紀夫』（小沢書店）『石原吉郎』（国文社）他。

ガリバーの質問

平成5年7月2日初版発行

著者——清水昶

発行者——小川康彦

発行所——五柳書院

東京都千代田区一ツ橋2-6-13
〒100-1 電話〇三(三二六四)四四二九
振替 東京2187479

印刷所——誠宏印刷

製本所——越後堂製本

定価——二〇〇〇円

五柳叢書 36 ©1993 Shimizu Akira

ガ リ バ ー の 質 問

装帧 高麗隆彦

目次

I

ガリバーの質問 8

自然としての状況 三好達治の場合 14

いつも詩人は、残して死ぬ 鮎川信夫追悼 26

「がっかりしたか」 北村太郎のニヒリズム 29

II

一本のナイフ 同人詩誌その他についての若干の感想 36

日本人の戦争 藤井貞和へ 43

詩人の死 菅谷規矩雄について 58

III

定型について

郷愁

112

死のテーマ

山頭火と酒

123 117

IV

丹下左膳

128 / 性愛について

129 / ひとりの出版記念会

131 / 表現者たち

133

／車椅子

135 / 病氣

137 / 石原吉郎

139 / 人間の死

141 / 真実

143 / 六〇年安

保闘争

145 / 売春

147 / 自転車泥棒

148 / 中原中也

150 / 火事

152 / 無頼派

154 / 絶望

156 / 幻臭

158 / 床屋

160 / 百円玉

162 / 賞

164 / 白衣

166 / 高橋秀

一郎

168 / エイズ

170 / 芥川賞

172 / 民主主義

174 / 赤穂

176 / 中上健次

178

／ハードコア

180 / 一茶

182 / 北村太郎

184 / 実話

186 / 鬼太郎がゆく

188 /

大学

191

I

ガリバーの質問

まる三日がかりでジョナサン・スウィフト（一六六七年―一七四五年）の『ガリバー旅行記』を読んでみた。さすがにくたびれたが子供の頃、絵本やダイジェスト版で接してはいるものの原作で読んだのは、はじめてだった。少し恥ずかしかったので、おそるおそる、まわりの友人たちに聞いてみると十人中十人までが原作を読んでいないという答えがはねかえってきたので一安心？した。原作の註をみると「ガリバー」とは「愚者」の意だそうだ。知らなかった。冷や汗ものがある。

どうして、いま頃、『ガリバー旅行記』を読もうと思ったかというところ、日頃の自分の想像力の貧困さに、あらためて気づき、子供の頃、荒唐無稽と思い込んでいた物語の中に、もっと深い何かを発見できるかもしれないという殊勝な動機からだった。

作者スウィフトの生涯は、決して幸福なものではなかったらしい。アイルランドに生まれてまもなく母は彼を置き去りにしたままイングランドに去っている。したがって彼は母の愛情をまったく知らなかった。スウィフトが女嫌いだったという言い伝えも、愛情の欠落にあったのかもしれない。アイルランドの大学を出てイングランドに渡るのだが、その間に清教徒革命あり、政治経済の混乱ありで、世の中の価値観は乱れに乱れていた。彼は四十六歳で英国国教会にぞくする

ダブリン派の聖バトリック聖堂の主任司祭（ディーン）という高い地位につく。しかし彼は、その地位に満足せず詩人や作家になることを切望しつづける。彼の故郷であるアイルランドは本国のイングランドに徹底的に搾取されており、その悲惨さは目を覆うばかりだったといわれている。スウィフトは、イングランド政府のもとに住みながらイングランドを憎みつづける。現在のイギリスにおけるアイルランド紛争は、実に根深いことを、あらためて考えさせられる。

彼の生涯は、よくわからない部分が多く謎につつまれているが、五十九歳にして『ガリバー旅行記』が出版され、はじめて作家として遅いデビューをしてスウィフトの名が世に知れわたるが、持病のメニエル症候群がもとで、七十八歳で狂死してしまふ。当時七十八歳というと相当、高齢だったはずだが、青年期に発病してிரை絶えず、その病気の再発の恐怖におそわれつづけて、その精神的苦痛は、まさに地獄だっただろう。「ガリバー」にも、その辺の精神的な揺れが拡大されたり縮小されたりしながら、顔を覗かせている。

ばくも若干、物を書く人種なので、経験的にも周囲の物書きたちを眺めていてわかるが、だれでも大なり小なり人間は病者なのではないかと思うことがある。それに肉体的病いは、精神の活動に大きく影響をあたえることがある。永く闘病生活を送っているひとが底ぬけにあかるかったり健康いっぱいのはずのひとが暗く沈み込んでいる「風景」は、身近なところで、いたるところに散見できる。病者ほど、自由闊達に精神が磨ぎすまされ、その利用如何によっては天才的「詩人」としてあらわれたりすることがある。利用に失敗すれば「狂人」にもなれる。女嫌いにもなれる。

「冗談はさておくとして、スウィフトが「ガリバー」に託した夢は、人間の理性のもんだいだっ

た。大雑把に言って、『ガリバー旅行記』の内容構成は、小人国、大人国、計算ばかりしている国、馬の国ということになる。つまりスウィフトは、色々な虚構の国を設定することによって、人間が、がんじがらめにされている常識というかんがえ方を破壊し、人間とは何か、理性とは何かということをかんがえつめていった。絵本でも有名な大人国、小人国は、そのいい例で「もののかんがえ方という尺度」を変えてみた場合、どのようにに真の理性が存在し、あらわれてくるのかという思考実験の物語だった。風俗や習慣によってあるいは時代によって、まったく異なる常識からの呪縛を真の理性へ向けて解放しようとしたのである。

自分を無にして、あえて「ガリバー」たる愚か者に仕立てたスウィフトは、逆に唯一絶対の理性を夢想した。さらに人間の死生観まで追い求めていく。諷刺や諧謔を自在につかいこなしながら、イギリス国家を根づよく批判することも忘れなかった。いわば哲学書たる『ガリバー旅行記』が、まさか後に全世界の子供たちに絵本として読まれることになるとはスウィフト自身、かんがえてもみなかっただろうと、岩波版の『ガリバー旅行記』の訳者平井正穂氏は、その解説でいっている。ただし、古典のダイジェスト版的絵本の悲しさは、好奇心をそこで子供たちに一時的にあたえたとしても、そこで心の成長をストップさせてしまう限界を持っていることだろう。

スウィフトが、いちばん力を込めて書いたのは、馬の国についての物語である。ほとんどの絵本にはこの馬の国は、はぶかれていと思うが、その理由は、あまりにも哲学的で「絵」にはなりにくいからだと思われる。馬の国では、馬が実権を握り、人間が奴隷として働かされている。

映画『猿の惑星』などは、ここからヒントを得たと思うのだが、一時、大ベストセラーになった沼正三の『家畜人ヤブー』なども、あきらかに『ガリバー旅行記』に負っているはずである。脱

線するが、日本の推理小説やSFは、その源にエドガー・アラン・ポーやスウィフトの影響をいまでも受けているといっても過言ではないだろう。劇の中にさらに劇をつくるといった手法は、村上春樹などにもみられるが、じつは、すでにスウィフトが身につけていた古典的な手法なのである。

馬の国の物語に、なぜ力が込められたかというところ、そこでスウィフトは、人間ないしは理性の窮極的なユートピアを想い描いたからだ。馬は、ややこしい文字を持たないかわりに鳴き声だけで、すぐに意志を疎通できる。それに姿かたちがサラブレッドのように威厳にみちている。食物は藁だけの粗食で満足し、決して他の国を侵略しようなどとかんがえたこともなく、自然そのものに同化して生きている。逆に奴隷である猿の顔をした人間は貪欲で狡猾で、油断も隙もない生き物として書かれている。その国では人間はヤフーと呼ばれ、さげすまれている。主人公の「ガリバー」は各国を航海する船医であり、語学の天才で語音からでも馬の鳴き声を聞きわけることができたので馬の国の主から他のヤフーたちと区別され特別待遇される。だが永くその理性の国に「ガリバー」は留まりたかったにもかかわらず馬の国の会議の決定により、追放されることになる。野蠻人ヤフーの狡智さが、より強大な力となっていつ馬の国の平安を乱すかもしれないと疑われたからだ。ちなみに『ガリバー旅行記』の中に日本も登場する。江戸、長崎、踏み絵といったことがでてくる。オランダ経由の知識としての日本だったかもしれない。それにしても二百五十年ほど前に書かれた『ガリバー旅行記』は人間の理性というものについて考えさせつづけてくれる驚異的な小説だと思う。古典というものには時間の新旧がない。そこには理性というものに対する永遠の質問と謎が生き生きとあるからだ。

そこで、問題にすべきはスウィフトの徹底したリアリズム、つまり現実、こうあるという「現在」という観念である。

すべての物体がまず訴える二つの感覚は視覚と触覚である。これらは、色、形、大きさ、そして物体の外側にあるその他の性質、または物体の外側に人工的に描かれる性質よりもさらに深く調べるということは決してない。

（「狂気についての無駄話」、「補物語」所収 一七〇四年）

このようなスウィフトのかんがえ方は、現象として日々の生活の上にあらわれたものしか信じないとする冷徹なリアリズムである。ではどうして『ガリバー旅行記』のような一見、コウトウムケイに思われる視点をずらした物語を書いたのか。その理由は「自分という人間は、いったいどこにいるのか？」といった単純かつ複雑な問いにはかならなかった。恋人が残した遺髪に対しても、それは「女の髪」つまり「もの」にしかすぎないといったスウィフトの「理性」の理想的な「現在」は、苛酷に未来を失ったというべきだろう。

スウィフトのかんがえた「理性」とは「現在」の生こそ、すべてとする思想だったのである。彼には夏目漱石が激賞しつつも不愉快であるといっている奇怪な文章がある。スウィフト発狂直前（一七二九年、六十二歳）に書いた『貧家の子女がその両親並びに祖国にとっての重荷となることを防止し、且社会に対して有用ならしめんとする方法についての私案』略して『貧困児処理法捷徑』。

かつて磯田光一は「拝啓スウィフト殿」という手紙形式で、この文章に触れ次のように書いて

いる。「あなたがアイルランドに帰っていかざるをえなかった晩年には、あなたの風刺の武器であった「理性」は、次第に狂気の様相を深めておりました。幼児を殺して食物にしてしまえば、両親や国の負担が軽くなってよろしいというあなたの提案は、『ガリヴァー旅行記』の「馬の国」の思想の延長上にあったように思われます。もし政策論に還元して申し上げれば、ヤフーどもを子供のうちにどんどん殺して食ってしまえば、人口の増加は防げるでしょうし、またあなたがへわが未開人は男一人で女四人を充分に相手にできる」から、繁殖用に若干の幼児を残せばよろしいというあたりにも、『ガリヴァー旅行記』のヤフーのイメージはアイルランドの現実描写として生きているではありませんか」と。イングリランド本国のアイルランド抑圧政策下において、ついにスウィフトは人間が人間であることの「理性」を放棄してしまったのではないか、ということが磯田氏の結論だった。すぐれて反体制的な風刺作家だったスウィフトの「理性」に対する深い絶望を磯田氏は、そこに見ているのである。もともと風刺とは逆説の力によって生き生きと成立するものなのだが、晩年のスウィフトは人間存在そのものに絶望してしまった。「馬の国」の人間獣ヤフーに、どのように「理性」なるものを説こうとも、すでにお手上げた、というわけである。

「理性」と「理想」はちがう。「人間はかくあるべきだ」というものが「理想」であって「理性」とは、理想の現実化である。スウィフトは「理性」をあまりに「現在」という現実に求めすぎたゆえに逆に「人間は理性的な動物である」というテーゼを反面教師として疑いぬいた。疑いぬいた末、人間存在そのものに絶望していった。「人間存在」とは、今日の人間獣ヤフーの、ぼくらひとりひとりの存在でもあるのだが……。

自然としての状況

——三好達治の場合

A 三好達治の愛国詩、戦争詩が意外に知られていないことにおどろかされるな。いっぱい書いてる。

B アンソロジーの編者たちが、つとめて避けているからでしょう。

A かくいうぼくも今度現代詩文庫『三好達治詩集』を編集するにあたって、意識的に避けている。片手落ちというものだが、アンソロジーを編むとなると、何となくそうなってしまう。読むに堪えないんだ。達治自身も、どうして自分が膨大な戦争詩を書いたのか、わからないんだね。混乱している。

B いまだから、あなたは、ふりかえって、そんなことがいえるんでしょう？

A 立原道造や中原中也は戦争を肌身にしみて知らなかった。その前に夭折してしまった。彼らだって戦中を生きていたら、どうなっていたかわからない。「四季派」には、そういうわからないさが最初からあるよ。幸か不幸か、三好達治は、ひとり「戦争責任」を負ってしまったようなところがある。

B 幸か不幸か、ですか。

A 達治の友人、桑原武夫がいつている。「戦争になって君も戦争詩を作ったが、君はやはり自